５．北海道とポーランド

第4回「午後のポエジア」が 2014 年6月 14 日（土）午後2時から北海道大学クラーク会館3階国際文化交流活動室で開催され、過去最多の 83 名の方が参加されました。ポーランド広報文化センターはじめ、たくさんのご支援、ご協力に心から感謝します。

◆ 斎田道子「消えた国 追われた人々」より

◆ 氏間多伊子「外郎売」口上から

◆ シャレック・レナタ
「ムロジェックの名句」

♫ リリアナ・コヴァルスカ、河村恵李アンナ、河村明希カリナ「お願い」

〈第 68 回例会〉

第4回「午後のポエジア」に出席して

佐藤　宣子

千代麿さん、暁子さんのお誘いで「午後のポエジア」に出席させてもらった。冒頭の朗読でいきなりポーランドの大地に引き込まれた。秋のポーランドを3度訪ねているのでヴィスワ川を中心とした情景が迫る。古く趣深い建物はもちろん鶏の放し飼い、収穫したばかりの赤ビートを満載したトラック、石炭を積んだ荷馬車、真っ赤な実をつけたリンゴ畑などわくわくする風景である。

ふと現実に戻ると「外郎売」の口上が滔々とよどみがなく上手い。3人のお嬢さんの愛らしい登場。そして 1955 年、世界青年友好祭で使われた歌を持ち帰って日本の歌詞をつけたという「森へ行きましょう」など本格的な歌唱。お父さん相手に少年ヤシュ君のジョーク。お一人ずつの熱演。最後は千代麿氏自作の書道俳句そして吟詠「陽炎や万羽はばたくヴィスワ川」、ヴィスワ川に始まりヴィスワ川の締め。「浜辺のうた」を篠笛が静かに奏でてお開き。

その後の懇親会は「ポロネーズを踊ろう」ということで私も仲間入り。手作りのケーキにお茶、ワインまであり心のこもったおもてなしで、またまた私はポーランドのあのときの感動を蘇らせた。それは17 年前、ウッジ市のポ・日友好交流会の席上皆でポロネーズを踊り、女性たちが「浜千鳥」などを美しい日本語で合唱してくださった。お返しに私たちは「シュワ・ジェヴェチカ」（森へ行きましょう）を唱った。まっさきに子供達が笑顔になり喜んで手をのべてきて、大人も立ち上がり輪になり「シュワ・ジェヴェチカ」の大合唱となった。少なくとも私はおぼつかない唱いかただったと思われるがとにかく大いに盛り上がった感激は今も忘れられない。17 年前の旅は谷本一之氏が団長を務めご一緒させていただいた。谷本氏は鬼籍に入られたが他の方々に今日お会いでき巡り合わせに感謝です。

そして世界が平和でありますように。

さとう・のぶこ（俳誌「夏至」編集長）

♫ 安藤むつみ＆ミハウ・マズル「森へ行きましょう」「今夜は帰れない」

◆長屋のり子「自作詩」から

♪端唄・三味線花季会社中〈三味線演奏〉
「黒田節」、「祇園小唄」他

◆ミコワイ＆ラファウ・ジェブカ「ヤシュ君のジョークに見えるポーランド人の性格」

◆尾形芳秀＆シルヴィア＝マリア・オレヤッジュ
「サハリン写真物語」

◆マズル・ミハウ「ポーランド語の発音を詩で練習しましょう」

♪栗原朋友子〈ウクレレ演奏・司会〉

◆小笠原正明「私のポーランド」より

◆小林暁子「ソネット」

◆霜田千代麿（書道俳句）「ポーランドろっく」

♪在北海道ポーランド人舞踊団「ポロネーズを踊ろう」

展示コーナー

♪福原光篠〈篠笛演奏〉

出演者のカーテンコール

懇親会風景　写真提供：尾形芳秀

朗読会「午後のポエジア」一覧

（◆ 朗読 ; ♬ 歌・ダンス・楽器演奏）

第1回「午後のポエジア」（第 57 回例会）

2011 年6月 18 日（土）14:00～、北海道大学クラーク会館3階国際文化交流活動室、参加者約 40 名

〈プログラム〉◆「ブラウンさんのネコ」スラウォミール・ウォルスキ（ヨゼフ・ウィルコン絵）**斎田道子**◆「タトラのねむれる騎士―ポーランドの伝説による―」アグニシカ・ウメダ再話（越智典子 文）**安藤むつみ**◆「灯台守」から ヘンルィク・シェンキェヴィチ（吉上昭三 訳）**小林暁子**◆「もの食う人びと」ヤルゼルスキ将軍（辺見庸インタビュー）**霜田千代麿**◆「寓話集」から イグナツィ・クラシツキ（沼野充義 訳）**佐光伸一**◆「昼の家、夜の家」から オルガ・トカルチュク（小椋彩 訳）**氏間多伊子**◆「シンボルスカの詩」&自作詩 **長屋のり子** ♬ “Kołysanka Rosemary” W.Młynarski / K.Komeda「ローズマリーの子守唄」W.ムウナルスキ / K.コメダ **ヨアンナ・クンツェヴィッチ**（Joanna Kuncewicz）◆“Jeszcze Polska nie zginęła dopóki kochamy” Urszula Ledóchowska「愛する限りポーランドは未だ滅びず」聖ウルスラ **ダニエル・ガイエフスキ**（Daniel Gajewski） ♬“Celina” Tata Kazika「ツェリナ」タタ・カジカ&◆“Wyznanie”, “Historie ludzkie” Czesław Miłosz「告白」「人間の歴史」チェスワフ・ミウォシュ〈歌と朗読〉**ウカシュ・ザブウォニスキ**（Łukasz Zabłoński） ♬“Kac Blues” Tomasz Stasiński「二日酔いブルース」トマシュ・スタシンスキ **ヨアンナ・クンツェヴィッチ**（Joanna Kuncewicz）&**マルタ・ジェムニツカ**（Marta Ziemnicka）〈キーボード演奏〉**ピオトル・パヴラック**（Piotr Pawlak）

懇親会

第2回「午後のポエジア」（第 62 回例会）

2012 年6月 16 日（土）14:00～、北海道大学クラーク会館3階国際文化交流活動室、参加者約 40 名

〈プログラム〉◆「ポーランドの子どものうた」（米川和夫訳）**斎田道子**◆“Na straganie” Jan Brzechwa **ラファウ・ジェプカ**（Rafał Rzepka） ♬“Tolerancja” Soyka **ダニエル・ガイエフスキ**（Daniel Gajewski）〈ギター伴奏〉**ヨアンナ・クンツェヴィッチ**（Joanna Kuncewicz）◆「母と娘の手紙」から マリー&イレーヌ・キュリー（西川祐子 訳）**小林暁子**◆“Stepy Akermanskie” Adam Mickiewicz, “Rzepka” Julian Tuwim **マズル・ミハウ**（Michał Mazur）◆「チェスワフ・ミウォシュ詩集」から チェスワフ・ミウォシュ（関口時正・沼野充義 訳）**氏間多伊子**◆自作詩ほか **長屋のり子**◆“Lokomotywa” Julian Tuwim, “Dzienniki”から Witold Gombrowicz **ウカシュ・ザブウォニスキ**（Łukasz Zabłoński）◆“Wczesna godzina”, “Odwódki” Wisława Szymborska **シルヴィア・オレヤッジュ**（Sylwia Olejarz） ♬“Ocalić od zapomnienia” Marek Grechuta **マルタ・ジェムニツカ=シルベスター**（Marta Ziemnicka-Sylwester）〈ギター伴奏〉**ヨアンナ・クンツェヴィッチ**（Joanna Kuncewicz）◆新作能「鎮魂」の台本朗読 ヤドヴィガ・ロドビッチ=チェホフスカ作（関口時正 訳）**霜田千代麿**,〈横笛演奏〉**福原光篠**

懇親会 ♬“Jeśli wiesz co chcę powiedzieć” Kasia Nosowska, “Odchodząc” Republika ほか〈歌&ギター演奏〉**ヨアンナ・クンツェヴィッチ**（Joanna Kuncewicz）◆とっておきの録音を紹介：“Matura”「卒試」Czerwone Gitary, 詩“Zaba”「蛙」朗読マジェーナ・ティムチョ（Marzena Tymcio）解説 **富山信夫**

第3回「午後のポエジア」（第 66 回例会）

2013 年6月 29 日（土）14:00～、北海道大学クラーク会館3階国際文化交流活動室、参加者約 50 名

〈プログラム〉◆「越境する霧」より ジェラゾヴァ・ヴォーラの空（若松丈太郎 作）**斎田道子**◆ポーランドのユーモアの古典 **ラファウ・ジェプカ**（Rafał Rzepka）◆ポーランドのオノマトペの詩 **マズル・ミハウ**（Michał Mazur）◆「外郎売（ういろうう り）」口上より～歌舞伎十八番内～（齋藤孝 編）**氏間多伊子**◆「くった、のんだ、わらった」ポーランド民話（内田莉莎子 訳）**大久保律子** ♬〈歌&大正琴演奏〉“Nim wstanie nowy dzień”「新しい日が来るまで」アグニエシュカ・オシェツカ, “Cichy zapada zmrok”「静かな黄昏れ」アリム・ドゥヴァル, “Chromolę”「まぁいいか」ヴォイチェフ・ヴァグレスキ **ヨアンナ・クンツェヴィッチ**（Joanna Kuncewicz）◆“Elegia podróżna”「エレジー」ほか ヴィスワヴァ・シンボルスカ作 **レナタ・シャレック**（Renata Szarek）◆自作詩ほか **長屋のり子** ♬〈音楽プレゼンテーション〉「ポーランドのジャズ」, ◆「イシズエ」（レオポルド・スタッフ作）**ウカシュ・ザブウォニスキ**（Łukasz Zabłoński）◆「アイヌ神謡集」から 梟（ふくろう）の神の自ら歌った謡「銀の滴（しずく）降る降るまわりに」（知里幸恵 編訳）**小林暁子**◆「トマトソースの中の魚缶詰」コンスタンティ・イルデフォンス・ガウチンスキ作, 「友達」アダム・ミツキェヴィチ作 **シルヴィア・オレヤッジュ**（Sylwia Olejarz）&**岩田真由美**◆「銃と十字架」（ポロニカより）佐々木マキ 作 **霜田千**

代麿 ♬「竹の唄」,「童神(わらびがみ)」,「竹田の子守唄」〈篠笛演奏〉**福原光篠**
懇親会

第4回「午後のポエジア」(第 68 回例会)
2014 年6月 14 日(土)14:00～、北海道大学クラーク会館3階国際文化交流活動室、参加者約 80 名
〈プログラム〉◆「消えた国　追われた人々」～東プロシアの旅～より抜粋(池内紀　著)**斎田道子**(Michiko Saida)◆「外郎売(ういろううり)」口上より～歌舞伎十八番内～(齋藤孝　編)**氏間多伊子**(Taiko Ujima)◆"Cytaty z Mrożka" Stanisław Mrożek「ムロジェックの名句」スタニスワフ・ムロジェック著 **レナタ・シャレック**(Renata Szarek) ♬"Życzenie" Fryderyk Chopin / Stefan Witwicki「お願い」曲フレデリック・ショパン / 詩ステファン・ヴィトヴィツキ **リリアナ・コヴァルスカ, 河村恵李アンナ&明希カリナ**(Liliana Kowalska, Eri-Anna i Aki-Karina Kawamura) ♬ "Szła dzieweczka do laseczka"「森へ行きましょう」, "Dziś do ciebie przyjść nie mogę"「今夜は帰れない」**安藤むつみ&ミハウ・マズル**(Mutsumi Ando i Michał Mazur)◆自作詩ほか **長屋のり子**(Noriko Nagaya) ♬〈三味線演奏〉「黒田節」,「祇園小唄」ほか **端唄・三味線花季会社中**◆"Kawałów o Jasiu kilka, czyli polskie podejście w pigułce"「ヤシュ君のジョークに見えるポーランド人の性格」**ミコワイ&ラファウ・ジェプカ**(Mikołaj i Rafał Rzepka) ♬〈ウクレレ演奏〉**栗原朋友子**(Tomoko Kurihara)◆映像「サハリン写真物語」写真 **シルヴィア・マリア・オレヤッジュ**(Sylwia-Maria Olejarz)解説 **尾形芳秀**(Yoshihide Ogata)◆"Wierszy na dykcję parę"(różne)「ポーランド語の発音を詩で練習しましょう」**ミハウ・マズル**(Michał Mazur)◆「私のポーランド」より抜粋(自作)北大理学部化学同窓会誌「るつぼ」31 号(1982 年)から **小笠原正明**(Masaaki Ogasawara)◆「ソネット」(アダム・ミツキェーヴィチ作 / 久山宏一訳)**小林暁子**(Akiko Kobayashi)◆書道俳句「ポーランド　ろっく」**霜田千代麿**(Chiyomaro Shimoda), アシスタント **淺野由美子**(Yumiko Asano) ♬〈篠笛演奏〉**福原光篠**(Mitsushino Fukuhara)
懇親会 ♬"Krótki Kurs Poloneza"「ポロネーズを踊ろう」**在北海道ポーランド人舞踊団**(Roztańczeni Polacy z Hokkaido)

ポーランド & ニッポン歳時記

(4)

林檎

夏の終わり、そして秋の始まりです。果物を採ったり、冬に備えた瓶詰めを作ったりする時期となりました。今年は去年と違って、豊作ではありません。林檎が熟する前に腐ってしまうそうです。ただもう一つ、私が心配になったのは、熟する前に採られた物、つまり、その後いくら時間が経っても最早熟した果実のようにはならない物です。

licealiści
przedwcześnie zerwane
jabłka

ściga się pociąg
ze słońcem zachodzącym
na skraju świata

jaki tu spokój
za ukwieconym polem
chatka pod lasem

ポズナン市、津田モニカ

高校生　熟する前にもがれた林檎
沈む陽と競うや線路の果てまでも
花越しの森際も小屋静かなり

(幼少期、母の秋仕舞いを窓から見てゐた)
秋の風コト・コト・コットン　子は出窓
開拓のみ霊送りのガンピの火
人ほろびず大地ほろびず天高し
秋風をスカートに入れ母海見

岩見沢市、霜田千代麿

(本書 26 59, 98 ページも参照)

〈第 50 回例会〉

ポーランド料理講習会

2005 年7月 16 日（土）に第 50 回例会「ポーランド料理講習会」が札幌市男女共同参画センターの料理実習室で開かれました。講師は「ポーレ」の連載エッセー「ポーランドの道産子」でおなじみのエディータ・ジェプカさん、メニューは Gołąbki（ポーランド風ロールキャベツ）とカッテージチーズ入りクレープでした。当日は2名のポーランド人を含む 21 名の方が集まり、「Gołąbki ゴウォンプキ（鳩）」という名前の由来は、今はロールキャベツの中はお米ですが、ポーランドにお米がなかったときはカーシャの実を入れていて、カーシャは鳩の好物だったので、このような名前になりました」というエディータ先生のお話から始まり、通訳を介しての説明にもかかわらず、皆さん、先生もびっくりするほど見事にポーランドの家庭料理を再現しました。料理後の試食会では予想以上の出来に皆さん大満足でした。

ポーランド風ロールキャベツ

（4人分）
- キャベツ　1玉
- 豚ミンチ　500 グラム
- 米　180 グラム
- 玉ねぎ　1玉
- サラダ油、塩、コショウ、ローリエの葉

あらかじめご飯を炊いておく。

1. キャベツを洗いそのまま電子レンジへ入れる。6分レンジにかける。取り出し、葉っぱを2枚はがしてから、もとのキャベツをふたたび6分電子レンジへ入れる。取り出して葉っぱを4枚はがしてから、もとのキャベツをふたたび6分電子レンジに入れる。葉っぱをキッチンペーパーの上で乾かす。
2. キャベツが電子レンジに入っている間に、ロールキャベツの詰め物を準備する。牛ミンチと米を混ぜる。玉ねぎ半分をおろし金でおろし、加える。塩小さじ3とコショウを少々加える。
3. キャベツの葉の芯と背を落とす。詰め物を葉の裏側に載せ、包む。
4. ロールキャベツをフライパンに載せ、ふたをして軽くいためる。
   （注意）キャベツの葉を巻き終わった部分を上にして焼くこと。後で移動しやすい。油がはねないように、フライパンを火からおろす。
5. 大きな鍋に 200 ミリリットルの水と塩を小さじに半分入れる。たまねぎの残りを角切りにしてローリエの葉と一緒に入れる。
6. 少し塩をして弱火で約1時間煮込む。

カッテージチーズ入りクレープ

（4人分）

○皮
- 小麦粉　2カップ
- 牛乳　2カップ
- 卵　1個
- サラダ油　小さじ1
- 塩　少々

○中身
- カッテージチーズ　2パック
- 卵黄　2個
- 砂糖　小さじ6
- バニラエッセンス　5・6滴
- レーズン　10 個
- マーガリン

お好みでフルーツソース、チョコレートシロップ、シュガーパウダーをクレープにかけてもおいしいです。

1. レーズンを柔らかくするためにお湯をかけ、そのままにしておく。
2. ボールに小麦粉を入れる。牛乳とサラダ油と塩を入れ。メレンゲでよく混ぜる。
3. 別のボールにカッテージチーズを入れ、卵黄、砂糖、バニラエッセンス、レーズンを加え混ぜる。
4. フライパンでクレープを焼く。焼きあがったクレープに中身を入れ包む。
5. 食べる前にフライパンで軽く妙め、暖める。

〈第 52 回例会〉

ポーランド料理教室 ～デザート篇～

2007 年2月 17 日(土)に第 52 回例会「ポーランド料理教室～デザート篇～」が開催されました。当日は 18 名の方々が参加し、おなじみの講師エディータさんにポーランド風のチーズケーキとアップルパイの作り方を教えていただき、そのあと、美味しく出来上がったケーキをいただきました。当日のレシピを掲載しますので、ぜひチャレンジしてみてください。

ポーランド風チーズケーキ

卵　4つ
カッテージチーズ　500 グラム
砂糖　4分の3カップ
バター　小さじ2分の1
片栗粉　小さじ山盛り
ベーキングパウダー
小さじ　すりきり1杯
バニラエッセンス（数滴）
レーズン　小さじ2杯

1. バターを溶かす。
2. レーズンに熱湯をかけ、柔らかくする。
3. 卵から白身をとりわけ、ミキサーにかける。
4. 黄身と砂糖をミキサーにかける。それに少しずつバター、片栗粉、ベーキングパウダーとバニラエッセンスを加える。次にカッテージチーズを加え、最後につぶした白身とレーズンを加え、丁寧に混ぜる。
5. 170 度の温度で1時間焼く。表面が焦げないようにするために、焼き上がりの 20 分前にケーキをアルミホイルでくるむ。

ポーランド風アップルパイ

○リンゴの部分
りんご　4個
水　100 ミリリットル
砂糖　小さじ3杯

○生地
マーガリン　100 グラム
砂糖　小さじ3杯
バニラエッセンス（数滴）
ベーキングパウダー　小さじ1杯
卵　1個
黄身　1個
小麦粉　1.5 カップ

○リンゴの部分
1. リンゴの皮をむく。細かく切り、鍋に入れる。水を加え、ふたをして 10 分間煮る。
2. 砂糖を加え、混ぜながら蒸発して水がなくなるまでさらに煮る。冷ます。

○生地
1. 材料を混ぜ生地を練る。それを4分の1と4分の3に分ける。大きいほうを延ばし、型に入れる
2. 生地にフォークで穴をあける。リンゴの部分を上にのせる。生地の小さな部分から、上にのせる飾り部分を作る。
3. 180 度の温度で 30 分焼く。

2005 年ポーランド料理講習会

2007 年ポーランド料理教室

手作りのポーランド料理は いかがですか?!

【メイン】ポーランド風コロッケ krokiety
ポーランド風ソーセージ kiełbasa
【スープ】ポーランドのお味噌汁と呼ばれる
ジュレック żurek
バルシチ barszcz
【デザート】リンゴパンケーキ racuchy
子供のときから大好きだったよ!

過去のメニュー Best 5
～超オススメ！～

2010 年から北海道大学の大学祭で定期的にポーランド人留学生のお店(テント)を出しています。北大祭は毎年6月最初の週末に、市民の皆さんをお迎えして、クラスやサークルの皆さんがさまざまなお店やイベントを催します。食べ物を作って売るお店が多く、留学生たちはほとんどが自分の国の料理を作っています。

出店場所は総合博物館の前あたり(北 10 西8)。普段日本では食べられないポーランドの食べ物を出します。ぜひ、おいしいポーランド料理を食べにきてください。

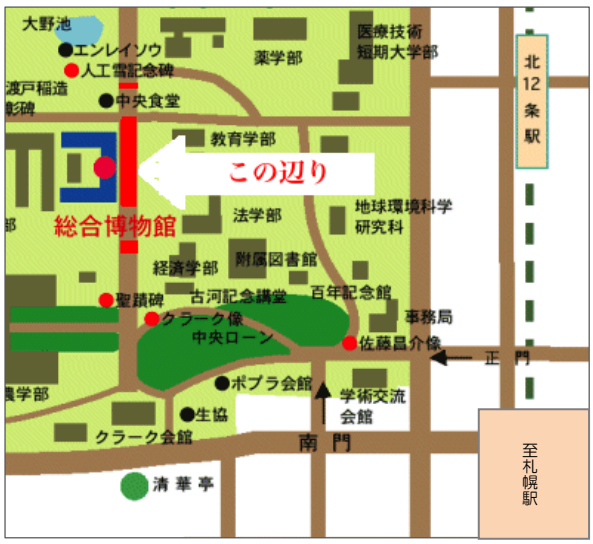
主催:北海道大学ポーランド人留学生会

協賛:ポーランド広報文化センター
後援:北海道ポーランド文化協会

開店のお知ら

6月5日（木）～8日（日）
9時～21時

※日曜日は午後2時閉店。【ご注意】
※土日は混雑が予想されます。
ポーランド人とのおしゃべり＆展示物を楽しむなら、平日がオススメ！



ポーランド留学生と私の 20 年

富山　信夫

外国で勉強してみたい！

今から47年前（1964年）のこと、ポーランドはビドゴシチの農業試験場で、親切にお世話いただいたパヴェウスカ博士が「あなたはまだ若いに、会社代表として海外研修できるとは幸せですね！私等研究者も西側国で勉強してみたいが、現状では無理！あなたが羨ましい！」と。

今でも忘れられない言葉であった。

ビドゴシチからアンナさん

それから26年後（1990年）、懐かしいビドゴシチ農試から若い研究者アンナ博士が遺伝・育種学研修のため北大農学部に来られた。「パヴェウスカ博士は引退されましたが、お元気ですよ。ショータ博士は現所長で、私は今ヤッセム博士の下で働いています」と。1992年、28年振りでビドゴシチを訪れた折、アンナさんのお世話で懐かしいショータ所長・ヤッセム博士ご夫妻、パヴェウスカ博士と旧交を温めることができ、「世界は狭くなりましたね！」と。

（左から）パヴェウスカ博士、ショータ所長、アンナ博士（1992、ビドゴシチ）

今まで知り合った留学生は50人

その後、灰谷教授や熊倉ハリーナさんの紹介で、留学生と知り合い、更に水曜昼食会でヤギェウォ大学、アダム・ミツキェヴィチ大学、ワルシャワ大学等からの多くの留学生と交流を続けている。

1993年文学部に留学された皆さんご存じのワタさんは現在ポーランド政府観光局長として活躍中で、昨年の「ポーランド・デーin札幌」では久し振りに来札された。また'95年皆さんご存じのマジェーナさんと一緒にスラブ研で勉強されたマウゴジャータさんの学位論文は「千島アイヌの軌跡」（アイヌ文化良書刊行会、2009、日本語）として刊行された。当時、一番若い留学生ラファウさんは北大で学位をとり、現在情報科学研究科助教として北大学生の指導に当られている。

（後列左から）Dr.ダリウシ(農)、Dr.ピオトル(理)、ラファウ(日研生)（前列左から）マジェーナ(スラ研)、筆者、Dr.ボグスワーヴァ(工)、マウゴジャータ(スラ研)（1997、北大）

また、先日の東日本大震災に際し、マジェーナさんをはじめダリウシ博士など多数の帰国留学生の方々から、心配と見舞いのメールを受信、有難いことであった。この20年間札幌で知り合った方々を数えてみたら、留学生は約50名、その他ポーランドの方々は約30名にも達した。

47年前のパヴェウスカ博士の言葉を思い出しながら、時代の変化と世代の交代を感じること一入（ひとしお）である。　（文・写真=とみやま・のぶお）

「水曜昼食会 500 回記念パーティー」では、ラファウ・ジェプカさんから深い感謝の言葉が捧げられた富山さん。1990 年代に本協会の「ポーランド語講習会」を維持された功績も大きい。協会を支え続け、会の活動を丁寧に写真や資料として記録なさっている富山さんには、感謝と共に頭の下がる思いでいっぱいです。（編集人）

駐日ポーランド共和国大使館＆在北海道ポーランド人会 主催

PRZYJĘCIE Z OKAZJI PIĘĆSETNEGO POLONIJNEGO OBIADU ŚRODOWEGO

ポーランド人「水曜昼食会」500 回記念パーティー

ラファウ・ジェプカ

なごやかに行われた記念パーティー 2011 年６月５日 札幌全日空ホテル

小さなコミュニティから

過去に札幌に住んでいたポーランド人の数も現在住んでいるポーランド人の数も調べ難いです。小樽商科大学の松家仁准教授の調べによると 1930 年9月 23 日にはフランシスコ会修道士のピヨトル・フェリクス・ヴィルク=ヴィトスワフスキ神父が札幌にいました。それは 1931 年1月 25 日の『ワルシャワ新聞』に掲載された記事「太陽の国、極東の国、日本から」をご本人が書かれたのでわかります。その後の 60 年間様々なポーランド人が札幌を訪ねるのですが、一番よく残されるのは研究業績です。はい、北大中心に札幌の大学のポーランド人留学生及び研究者が昔から来ています。

私も 1996 年に留学のために来札しました。その時もう既に数人の在札幌ポーランド人の「プチコミュニティ」ができていました。読者の大半がご存知の熊倉ハリーナさんが中心人物になり、時々ポーランド人同士で食事をしていたのです（時計台前のロイヤルホストでした）。

水曜日に集うわけとは

大体同じ頃、北大の研究者も食堂で食事するようになりました。日にちは木曜日で参加者は3人を超えることはなかったそうです。熊倉さんとその研究者が札幌を離れたころ、うちの妻がポーランド語の講義をもつことになりました。2001 年の4月でした。毎週水曜日にお昼までの授業だったので、他のポーランド人留学生に声をかけて北大の中央食堂で集まるようになりました。メールと携帯電話の時代ですから、在札幌ポーランド人の HP を作って、「Polacy Sapporo」（札幌のポーランド人）を検索したら「水曜昼食会」のことが誰でもわかるようになりました。情報がどんどん広がって今のところは 40 人ぐらいのポーランド人が北海道にいます。実際に参加できる人数は十数人だけですが、メーリングリストによって情報交換をして、様々なイベントの計画を皆に届けるようにしています。今は「水曜昼食会」だけではなく、花見、キャンプ、温泉旅行、スポーツイベントでの応援などのイベントを毎年行っています。

あっという間に 500 回

2011 年7月 20 日に 500 回目の「Polish Lunch」を迎えました。その機会を祝いたいという話が北海道ポーランド文化協会から届いて、金銭的なサポートまで約束されて、同年6月5日に在北海道ポーランド人の「水曜昼食会 500 回記念パーティー」を盛大に執り行うことができました。同時に大使館のサポートも受け、札幌の全日空ホテルでポーランド料理も味わえる会場で、ポーランド大使館のドミニカ・ヤキモヴィチ=ブウァシュチク領事をはじめ、北海道ポーランド文化協会および札幌映画サークルの皆様と、在札幌ポーランド人とそのご家族が一緒に集まることができました=写真左=。

映画情報にも詳しいドミニカ領事との交流

記念すべき日

いつも我々を応援してくださる方々のお陰で夢でも見た事がない素敵な場所で北海道の歴史の中で一番多くの在札幌ポーランド人が集うことができました。2時間のパーティプログラムの中にはスピーチとアトラクションなどがありました。1992 年から在北海道ポーランド人の情報を集めてきたポーランド文化協会の富山信夫さん、及び安藤会長のスピーチ、「札幌のポーランド人」という写真の上映会もありました。メインアトラクションは在札幌ポーランド人の演奏と歌で、日本人の参加者が聞いたことはないと思われる、別々のジャンルの3曲を選び披露しました。ホテルのシェフがビゴス，フラチキ（モツスープ）とスハボヴィ（トンカツ）に挑戦し、様々な次元で感動しました。

この 10 年に一回しかないパーティーでは、北海道ポーランド文化協会の氏間多伊子さん及び佐光伸一さんにはなみなみならぬお力をお借りいたしました。また、富山信夫さんをはじめ多数の方々から貴重な情報と写真を提供していただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

「ポーランド」というつながりで皆様と楽しい時間が過ごせることはとても嬉しく思います。これからも引き続き北海道でポーランドと日本の交流を行っていきたいと考えています。今後とも皆様方の更なるご協力とご支援をお願い致しまして御礼のご挨拶とさせて頂きます。（北大情報科学研究科）

ポーランド人参加者

アレクサンドラ・ヤヴォロヴィチ	ヨアンナ・クンツェヴィチ
アグニェシュカ・クサマ	ミツ・クサマ
ナディア・クサマ	アンナ・パヴラク
ピオトル・パヴラク	セバスティアン・パヴラク
アグニェシュカ・ポヒワ	ユキコ・プタシンスキ
ミハウ・プタシンスキ	ハナ・プタシンスキ
ヨランタ・シマダ	ニコラ・シマダ
ジュリアン・シマダ	カロリナ・ザブオニスキ
ウカシュ・ザブオニスキ	ミカエラ・ザブオニスキ
マルタ・ジェムニツカ	マルチン・ヤンチャレク
ミハウ・マズル	アキコ・タケヤ
トマシュ・スタシンスキ	エディタ・ジェプカ
ラファウ・ジェプカ	ミコワイ・ジェプカ

―キロロからの参加―

アンジェイ・シヴィルコヴスキ
シモン・グレジュク
ヨアンナ・コヴナツカ

ポーランド人 29 人が集う記念すべき日になった

GDYBYM MIAŁ GITARĘ

Gdybym miał gitarę
To bym na niej grał
Opowiedziałbym o swej miłości
Którą przeżyłem sam.
A wszystko te czarne oczy
Gdybym ja je miał
Za te czarne, cudne oczęta
Serce, dusze bym dał.

（アトラクションで披露された歌のひとつ）
♬「もし僕がギターを持っていたら」♬
もし僕がギターを持っていたら、
ギターを弾いて、
僕が自分で体験した愛について
語ることができるのだけど。
そうこの黒い瞳こそすべて
もし僕がその瞳を自分のものに
出来るならこの黒くて、奇跡的な瞳のために
心と魂をささげることができるのだけど。

ポーランドの道産子

Edyta Rzepka　エディータ・ジェプカ

私たちは、大学の勉強を終えてまもなく結婚し、すぐに日本にやって来ました。私たちは若く、これから住むことになるだろう世界と国に対する好奇心でいっぱいでした。始めはここに1年半だけ滞在する予定だったので、子供を作ろうなどという考えが浮かぶこともなく、1年半という時間を、日本のさまざまな場所を訪ね、ひとと知り合い、文化を知ることに最大限使いたいと考えていました。実際その通りになりました。日本での最初の数ヵ月は、学業はもちろんですが、それ以外には主として遊びに時間を費やしました。

ここに後3年残ることになったとき、自分たちの子供を作るという考えが徐々に生まれ始めました。しばらくの間それは単なる将来の計画に過ぎませんでした。私たちは親の役割を果たせるほど成熟していましたが、まったく別の理由で私の方に精神的な準備が出来ていなかったのです。というのも当時の私の日本語の知識は不十分で、このことでいつも不便な思いをしていたからです。そういうわけで勉強に取り掛かり、いくつかの日本語のコースに登録しました。そして時は流れていきました。

私たちの周りの知り合いの夫婦たちが、子供の誕生という喜びにあふれたニュースをますます頻繁に知らせてくるにつれ、友人たちがもう子供を生む決心をするほど勇気があることに対し、私の中に一種の嫉妬心のようなものが生まれました。というのも私は絶えず怯えていました。もっとも怯えていたのは、おそらく一番近しい家族から遠く離れたよその国で、自分たちだけではうまくやっていけないのではないかということです。しかしついに転機となる日がやって来ました。自分を信じる心を与えてくれたのは、私の日本語の先生でした。あるメールで彼女は二番目の子供をアメリカで生んだと知らせてくれました。彼女も自分の母国から遠く離れ、頼れるのは夫だけで、それに加え小さな子供を二人も抱えていたのです。そのとき私の念頭に次のような考えが浮かびました。この世にはきっと私と同じような状況にありながらも自信をもって立ち向かっている女性が何千人もいるに違いないと。どうして私に出来ないことがあるでしょうか。

私たちが親になると知らされた日は、おそらく長いこと私たちの記憶に残るでしょう。それは大きな喜びでした。この喜びは、子供の将来の計画を立てること、子供の名前を考えること、私たちの小さな部屋に子供用のベッドを入れるために家具の配置を考えることと結びついています。妊娠したということを病院で確認する前に、この嬉しい知らせをポーランドの両親ともう分かち合っていました。

すぐに病院に行かねばなりませんでした。一番近い産婦人科がどこにあるかインターネットで調べ、翌日に出かけました。中に入ると、待合室がうす暗いのにぞっとし、患者が全く誰もいないのに驚かされました。それに加えて、私たちが腰掛けたソファーから、眺めた雑誌にいたるまで、ここにあるものすべてが古ぼけていました。お医者さんまでが年寄りで、あまり親切なひとではありませんでした。検診が終わって私たちが医者から耳にしたのは、「おめでとうございます」というお決まりの表現ではなく、「産みたいんですか」という質問でした。「一体何を聞くの！」と私は思いました。「こんなに長年にわたる経験豊かな医者が、自分の患者の顔からこの喜びの表情を読み取れないなんて一体どういうこと！」。私たちがあらかじめカルテに書いておいた質問に対しても面倒くさそうに、短く答えただけでした。自分が妊娠したということ以外何も知ることが出来ませんでした。それどころかこのクリニックを出ながら、以前にもまして疑いと恐怖の念を感じ震えながら確信したのです。「日本でなんて産みたくないわ！」

「日本でなんか産みたくないわ！」「イヤよ！」初めて病院を訪れた後、私はこういう風にしか考えられませんでした。主人はいつものように私を慰めてくれます。「大丈夫だよ。知り合いに聞いたり、インターネットで調べたりして、いいお医者さんや居心地のいいクリニックを見つけようよ。」

しばらくしてようやく日本にはふたつのタイプのクリニックがあると知りました。つまり産婦人科と婦人科です。それまでそんなことは知りませんでした。最初に私たちが探し出したのは「間違った住所」、つまり婦人科のクリニックだったのです。だから多分お

医者さんは少し不親切だったのでしょう。もうこれ以上ここに来ないようにそうやって私たちに分からせようとしたのかもしれません。でもどうして直接そう言ってくれなかったのでしょうか？分かりませんが単にそんな性格の人だったのかもしれません。いずれにせよ妊娠した女性でこんなクリニック、こんなお医者さんのところに行きたがるひとなんていないに違いありません。私も行きたくありませんでした。

だから一ヵ月後の次の検診までには知り合いに落ち着いて聞いたり、インターネットでいろいろなクリニックを探したりして自分たちの考えで一番いいところを選ぶ時間がありました。今回の「探索」では、札幌在住の女性がいろいろな病院での自分の体験を書いているインターネットのディスカッション・フォーラムを見つけました。簡単に言えば、そこでは病院や具体的なお医者さんを他の女性に勧めたり思いとどまらせたりしているのです。そのフォーラムを読み、日本で女性は麻酔を受けて出産することは稀で、出産の時、麻酔をしてもらえる病院は札幌には多くないと初めて知りました。

私にはこのことは非常にショックでした。というのもヨーロッパやアメリカでは出産時の麻酔は非常に一般的で、およそ半分の妊婦が麻酔を利用しているからです。ポーランドでも同様で、出産時には麻酔を「希望」しそれを（有償で）受けることが出来ます。私は以前に一度も出産をしたことがなくそれがどんな痛みかも分からなかったので、麻酔を受けることが出来るところを選びたいと思いました。ディスカッション・フォーラムのリストの中で他の女性に評判がよく、家の近所にあり、麻酔を受けられるとなると、残ったクリニックはたったひとつでした！やがてそこに出かけました。他に選択の余地がないという心理的な思い込みがそうさせたのかもしれませんが、その病院はすぐに気に入りました。

入り口をくぐるとすぐに自分が病院ではなくてまるでホテルにいるのではという印象を受けました。清潔で、広々としていて、明るい色にあふれ、静かで、スピーカーからは落ち着いた音楽が流れ、接待も気持ちよく、このクリニックのことを良く言う患者さんもたくさんいました。お医者さんも若くて愛想が良く、外国人の訪問に驚いた様子もありませんでした。この病院ではよく外国人が出産しているようにも見えました。

次の患者さんが列をなして待っているというのに、私の質問に辛抱強く答えてくれました。後で私は助産婦さんと話をすることになり、私にいくつか質問をして、私の疑問にさらに答えてくれるとも教えてくれました。助産婦さんの説明のなかでひとつだけが、私にはショックでした。彼女は私の体重を量ったあと、何か自分のノートのようなものを見て、私はこの妊娠中に9キロ、最高でも10キロしか太ってはならないということでした。最初は笑顔でこのことを受け止めました。でも後になってこれが日本ではいかに大事なことなのか、どれほどきちんと管理しているかがわかりました。おそらく多くの女性が妊娠中に体重が増えすぎて、あとでその余分な目方を減らすのが大変だからでしょう。

それ以外にも助産婦さんは話の間に私の頭に浮かんだ質問に答えてくれました。この会話のことをとてもよく覚えています。彼女はあまりにも親切だったので、こんなクリニックと彼女のようなひとの看護のもとでなら私はすぐにでも産みたいと、もうその場で彼女に言ったほどでした。　　（佐光伸一　訳）

〈北海道のポーランド人から〉

百聞は一見に如かず

～日本でPTA会長を体験して～

ラファウ・ジェプカ

Rafał Rzepka 1974年シチェチン生まれ、ポズナニ大学卒（日本語学）。日本政府奨学金を受けて北海道大学、小樽商科大学に留学、北大大学院工学研究科博士課程修了、現在は同情報科学研究科助教として人工知能の研究に従事。家族は妻と一男。

来日する前から日本の子供の生活の恐ろしさについていろいろ聞いていました。生まれてすぐ教育レベルの高い幼稚園に登録され、幼いときからどんな大変な状況にも耐え、打たれても壊れない会社員になるために朝から晩まで兵隊のように育てられるというイメージに私は怯えていました。そのため、札幌に来て日本の子供たちの笑顔を見たときは、本当にホッとしました。でも心の中では「これは刑務所から一時出所した嬉しさの表情かもしれない」といった疑念が離れませんでした。二、三回聞いたり読んだりした話がいったん頭に刷り込まれると、取り除くのはとても難しいと痛感させられました。

日本の子供に対するこのようなステレオタイプはいったいどこから来たのかすぐには思い出せないのですが、おそらくその大きな源は、日本に関する旅行記や面白おかしく煽り立てるような記事などです。このような記事は21世紀になってから目立って増えましたが、1970–80年代にポーランド人が書いたものにもそのような傾向がありました。のちに英語で読んだ本でも同じような話を何度も見かけたので、多分著者が面白いと思った話に尾ひれがついて、いろいろなところで繰り返されてきたのだと思います。

こうしたステレオタイプを作り上げてきたもうひとつの大きな要因は、ポーランド人同士が会話をするとき、何かについていいことばかりを話すと、自然と「悪いところも言わないといけない」とバランスを保つためにネガティヴな「逆の面」も話題にするという傾向があります。日本好きの集まりでも「日本人は家族を大事にしない」「日本は引きこもりの国」「日本人はクジラやイルカを殺し過ぎ」など、日本の社会問題について議論が絶えません。

日本に来ても、それらの問題が実際どれほどの規模のものなのかは分かりませんでした。テレビにはそういう話題が出ないよう政府がマスメディアを管理しているのではと、社会主義の「嘘」の時代に育てられた私は自然に考えがちです。

しかし、日本語がちゃんと読めるようになり、直接日本人の友達と話したり、インターネットで調べたりできるようになると、日本社会の自由度が分かってきました。問題の規模や一般的な日本人の考え方など、両面を見ながら確認できるようになりました。事実の両面性という問題に興味を惹かれたので、コンピュータによるバイアスのない情報抽出を研究テーマの一つにしました。

とはいえ、私が日本について完璧な知識に達したわけではありません。友達の数も限られています。同じような考え方を持つ人と仲良くなるので、そこから形成される考えはどうしても偏りが出てきます。このように限られた人を通した知識の形成には限界があります。それではインターネットという手段はどうでしょうか。インターネットで得られるすべての情報を読むのは不可能ですし、コンピュータプログラムに抽出してもらっても、現状では、コンピュータによる言語理解の技術は意味の処理という点ではまだまだ未熟で、やはり誤った知識が形成される可能性が高いのです。そこで思ったのは、やはり自分自身の努力が不可欠ではないかということです。日本の大学に入学してその仕組みが大体分かってくると、日本の大学に対するネガティヴなイメージはほとんどが作り話だと判明しました。

つぎの心配は、日本に生まれて育てられる子供の将来を決定する環境でした。妻は日本語の勉強をしながら同じ北大でポーランド語を教えていましたし、子供には日本語も必要だと思って長男を保育園に入園させることにしました。ポーランドでは、そもそも「保育園」（żłobek）は非常に評判が悪いので、ポーランドにいる私たちの母たちはパニックになりました。子供がポーランドのやり方のようにほっとかれるか、日本のやり方で兵隊のように厳しく育てられてロボットになるのではないかと心配したのです。

しかし、私たちはステレオタイプの多くが嘘だと分かり（そのほとんどは程度の差か、場所による違いです）、いくつかの保育園を見学し、楽しそうに笑いながら走っている子供たちの姿を見て、ちょっと安心して預けることにしました。それでも心配は残っていましたが、まだ言葉をしゃべらない息子から保

育園の出来事を報告してもらうことは不可能なので、先生方が書いてくれる「連絡帳」という情報を唯一のソースとして活用しました。

そのうち突然、保育園をもっと知るためのチャンスが現れました。それは「後援会」です。親が集まり、園長先生や他の保育士のみなさんといろいろなイベントを企画する会です。その集会にはどんな質問でも答えてくれる先生たちと、似た悩みをもつ親たちが参加し、とてもためになったので、さらに大きな安心を得ることができました。活発に参加し一生懸命な姿を見せてしまったため、私はどんどんと組織の前面へと押し出されました。後援会長に祭り上げられ、勉強だけではなく、例えば子供の安全のための活動にも参加することになりました。

このような経緯で、長男が小学校に入学したときは、躊躇せずに PTA の活動に参加しました。最初は学級代表、そのあとは PTA 副会長に誘われました。保育園と比べたらいろいろ忙しかったので、会長にならないかと誘われたとき、副会長より楽そうに見えたので会長を選びました。普段使わない敬語の多い挨拶がメインの仕事だと聞いて、やっと自分の日本語の大きな弱点の一つをなくすチャンスにも見えました。もちろん他にも大きな理由が二つありました。一つは日本の学校を中から見ることができること、二つ目は外国人の立場からのメッセージを発することです。

PTA 会長として入学式（左）運動会（右）で挨拶する筆者

「外国人だから無理」というセリフはよく耳にしますが、実は「地元の言葉が出来ないから無理」というケースが多いと思います。「文化や考え方が違いすぎる」というのは言い訳に過ぎません。個人の「事実を知る気のなさ」と社会の「やる気のなさ」が問題だと思います。異国の生活や文化に関して、書物やメディアをにぎわせるプロの文筆家の発言には、読者にアピールするための誇張もあると思います。

国の本当の姿は近くから見るべし、ともいえます。そこで、専門家ではない私たちが日本の文化、ポーランドの文化について、自分自身で経験したこと、感じたことを率直に《Pole》のようなポーランド好きの方々向けの会報に書くことは、とても価値のあることだと思うのです。ぜひ《Pole》の読者のみなさまといろいろな経験をシェアしたいと思います。今後は北海道に住んでいるポーランド人の声を集めてご紹介していきたいです。

ロドヴィッチ大使を迎えて「ポーランド in 北海道」開催！

来る 2010 年2月、ヤドヴィガ・ロドヴィッチ駐日ポーランド大使をお迎えして、北海道でポーランドを広く紹介するためのイベント「ポーランド in 北海道」が開催されます。イベントは政治、経済、文化など多岐にわたり、当協会ではピアノコンサート、映画上映会、大使の講演会などを予定しています。

ショパン生誕 200 年を記念して、雪まつり会場でのショパン像の製作や、ショパンコンサートの開催なども行い、皆様のご参加をお待ちしております。

「ポーランド in 北海道」プログラム

2月5日（金）

- ✧ ロドヴィッチ大使、高橋はるみ北海道知事、および上田文雄札幌市長を表敬訪問
- ✧ NHK テレビおよび北海道新聞のロドヴィッチ大使へのインタビュー
- ✧ 「ポーランド・デー in 札幌」在日ポーランド商工会議所主催、シェラトンホテル札幌にて
  - ショパン・プログラムによるピアノリサイタル（ピアニスト 坂田朋優さん）／ポーランド料理の試食会／お楽しみ抽選会

2月6日（土）

- ✧ ロドヴィッチ大使、第 61 回さっぽろ雪まつりを見学、ポーランド大使館貿易・投資促進部スタンドにてポーランドの紹介、製品販売
- ✧ 雪まつり会場でショパン雪像製作
- ✧ ポーランド羽毛衣類 ファッション・ショー
- ✧ ポーランドの琥珀アクセサリー、食品ブース
- ✧ ピアノリサイタル＆声楽「ショパン in 北海道」ザ・ルーテル・ホールにて
- ✧ ポーランドへの観光プロモーション・イベント
- ✧ ロドヴィッチ大使の講演「ポーランド文化」北海道ポーランド文化協会主催
- ✧ ポーランド映画「ニキフォル　知られざる天才画家の肖像」（クシシュトフ・クラウゼ監督）上映会+大使挨拶、シアターキノにて

駐日ポーランド共和国大使館を訪問

さる 2011 年 10 月7日、事務局担当の筆者と、会計・ポーレ編集で活躍されている氏間多伊子さんのふたりで、東京の恵比寿にある駐日ポーランド共和国大使館を訪問しました。

ポーランド大使館は常にポ文協の活動に理解を示され、特にここ3年間は多くのイベントにご支援をいただいています。昨年2月にヤドヴィガ・ロドヴィチ大使が来札され、ルーテルホールでのコンサートに出席されたのが遠い昔のことのように思えるほど、近年の大使館とポ文協の交流は緊密でした。

今回の訪問は、本年4月の「ポーランド現代映画セレクション 2004-2009」、6月のピアノコンサート・領事来札記念映画上映会などの行事の成果の報告と、ご支援に対するお礼、そして今後の活動への協力の要請が目的でした。

大使館では、激務にもかかわらず、ロドヴィチ大使ご自身にお会いすることができました。ほかにも、ドキュメンタリー監督で、4月の映画祭ではワークショップを行ってくださったチェホフスキ監督（大使の夫君）、そして監督と一緒に来札された一等書記官のラデックさん、4月に上映した4本の作品の選択・上映権の取得・字幕の作成など事実上すべての業務をやってくださった文化担当のミロスワフ・ウーチュコさんが集まってくださり、非常に熱のある話し合いになりました。大使館でも札幌での映画祭を大成功ととらえ、第2弾の支援、そしてうまく行けば 2012 年中にもう一度第3弾のイベントの共催を提案してくださり、4月の映画祭でのわたしたちの頑張りが理解されていることを実感できました。

また、6月のコンサートに合わせて来札されたヤドヴィガ・ヤキモヴィチ領事とも再会し、旧交を温めました。ちょうど 10 月9日にポーランドの議会選挙があり、日本在住のポーランド人は大使館で投票するため、その準備に忙殺されていたにもかかわらず、30 分ほど時間を割いてお茶を御馳走してくださいました。映画祭の第2弾の計画には大賛成してくださり、近々お母様が来日されるので、お勧め映画の DVD を持ってくるように頼んであげると言ってくださいました。大使館のご自身のオフィスで猫を飼っているところに、ドミニカさんの温かいお人柄が表れているようです。

このように大使館で非常に暖かく迎えていただけたのは、ラデックさんと私が 10 年前からの友人ということもありますが、ロドヴィチ大使と前ポ文協会長・故灰谷慶三先生、現副会長・霜田千代麿さんとの交友関係が大きな役割を果たしていると思います。先輩の世代からのお付き合いを、今後も大切に育んで行きたいと、大使館を後にする際に、強く心に刻んだのでした。（佐光 伸一 さみつ・しんいち）

写真（左から）ラデックさん、ウーチュコ文化担当、チェホフスキ監督、ロドヴィチ大使、筆者、氏間さん

コザチェフスキ大使さっぽろ雪まつりへ

～北大総長らを表敬訪問～

本 2014 年2月4-6日コザチェフスキ駐日ポーランド大使が来札されました。今回の目的は、さっぽろ雪まつりへの参加と、高橋はるみ北海道知事、山口佳三北海道大学総長らと会談し、ポーランドと北海道との関係の基盤をさらに強化することでした。

一行は5日早朝、北海道大学を訪問して山口総長=**写真1**=と会談し、今後の相互交流の促進について話し合いました。北大は世界中の多くの大学と交流協定を結んでいますが、ポーランドの大学との協定はまだありません。今後、北大とポーランドの大学で協定が結ばれ単位の互換などが実現すれ

ば、ポーランドに留学する学生がもっと増え、ポーランド語学習熱も高まるのではと、ポーランド語教師の筆者は期待を膨らませました。

次はスラブ研究センターを訪問し、宇山智彦センター長をはじめ、東欧研究のスタッフ=**写真2**=に迎えられました。随行のトマシュ・ヤムルズ一等書記官は、言語学の野町素己准教授のワルシャワでの日本語の教え子で、先生と旧交を温めました。大使は、ポーランド研究に携わる院生・研究者に対しポーランド政府・大使館は全面的にバックアップすると強調しました。センター図書室の視察では、ポーランドの新聞・雑誌の最新号が閲覧できることにとても驚いている様子でした。

午後は道庁赤レンガ庁舎・樺太関係資料館を視察し、尾形運営委員のご案内で、樺太の残留・亡命ポーランド人の記録を含む展示を熱心にご覧になりました。特にヤムルズ氏は日本史にたいへん興味があり、尾形さんを質問攻めにしていました。

そのあと大使は高橋北海道知事を表敬訪問しました。高橋知事がポーランド大使と会談するのは、4年前のロドヴィチ前大使に続き2回目です。

そのあと一行は、夕方の便で東京に戻られました。別れ際に大使は北海道ポーランド文化協会への支援は惜しまないと述べ、今回の訪問での数々の出会いを“good meeting”と表現して北海道を後にされました。　（文・佐光 伸一、写真・尾形 芳秀）

写真１（左３番目）山口総長（右隣）大使

写真２（左３番目）宇山センター長（右隣）大使

～国際雪像コンクールポーランドチームを激励～

さっぽろ雪まつり第 41 回国際雪像コンクールに、ポーランドから2回目となる女性3人のチーム「シュクラルスカ・ポレンバ(Szklarska Poręba)」が参加し、2月5日（水）にコザチェフスキ大使が激励しました=**写真3**=。

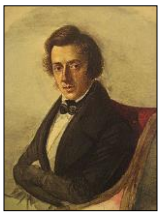
チームはポーランド南西部の、チェコと国境を接するドルヌィ・シロンスク県から派遣された、リーダーのマリア・ミシュタルさん（幼稚園長）、メンバーのヨアンナ・スヴェフさん（ブロツワフ市記念物保護官）とユスティナ・グラフさん（学生）の3人です。

雪像は「カルコノシェ山の谷に水を注ぐ女神」という、女性チームらしい大変精密な作品で、前回より完成度も高く仕上がりましたが、全体に他国より像が少し小さかったせいか、残念ながら入賞は逃しました。凍って固まった雪のブロック（3m×3m）を女性3人で加工するのは大変な重労働だったと思います。

その間にも内外の観光客から次々と話しかけられ、写真を一緒にという要望も多く、対応に大忙しでした。親善友好の点では、他のチームよりも高く評価されたと思います。　（文/写真・尾形芳秀）

写真３　雪像チームを激励する大使（右２番目）

「調律師 ―ショパンの能」を観て



魂の深奥を表現する演劇「能」と、魂の歌「ショパンの音楽」との出会い
ポーランド大使作品、ショパン主題の能を上演、2月28日、国立能楽堂

霜田千代麿

2011 年2月 28 日午後6時 30 分より、東京の千駄ヶ谷にある東京能楽堂に於いて、新作能「調律師―ショパンの能」(90 分)という公演があった。当日は高松宮妃殿下も観劇された。美智子皇后も観劇の御希望であったが何か御都合が悪かったという事が紹介された。実は天皇御夫妻が 2002 年にポーランドを訪問された時、通訳をされたのがイガ・ロドヴィッチ現大使であった。

5時半の開場前から沢山の人々が正面玄関前に押し寄せた。開場は 10 分程遅れて始まった。6時過ぎに大使もホールに姿をあらわした。昨年2月にさっぽろ雪まつりの時に行われた「ポーランド・デー in 札幌」以来の再会であった。元気そうに振るまっておられたが、体調の方は充分とは見えず、3月3日の金沢公演は欠席との旨パーティーでスピーチされていた。

「調律師―ショパンの能」は言うまでもなく、イガといふ日本文学研究者の力があってこそ完成されたものである。彼女はポーランドにおいて、演劇の勉強をした役者であり、劇団にも所属していた。同時に東大留学中は鉄仙会(てつせんかい)で観世寿夫(ひさお)や観世栄夫(ひでお)の指導の下、観世流の謡(うたい)から能を演じた事のある実践者である。ポーランドへ能を紹介した第一人者である。公演の後、日本企業、学者、能楽、音楽、演劇関係者のパーティー(40 名程)が開催され、私も北海道ポーランド文化協会、演劇関係者として参加した。

その時、イガが僕にいった言葉は「どうー。涙が出た」と訊ねられたが、その時はその意味がわからなかった。しかし、今、このレポートを書いていて、はじめて彼女の言葉の意味がわかった。

〈前シテ〉調律師:観世銕之丞 **=写真左=**
〈後シテ〉ショパンの霊:観世銕之丞
〈ピアノ〉横山幸雄 **=写真中=**
〈ワキ〉ドラクロワ:殿田謙吉
〈作〉ヤドヴィガ・M・ロドヴィッチ **=写真右=**
駐日ポーランド共和国特命全権大使

この作品は単なる新作能というにはとどまらず、彼女の生きてきた集大成なのだという事である。東京留学中、山の手線の車中で彼女が「私は今、静岡県三島市にある中川宗淵(そうえん)老師の龍沢寺(りゅうたくじ)へ通っている」と言った事を記憶している。その時、私には日本文化の趣味としてやっているとしか理解していなかった。実は彼女は一つの作品を創作する為の「自分の塔」を積み上げるべく基礎の部分を着々と作っていたのだと、今思う。龍沢寺は白隠禅師ゆかりの名刹であり、当時中川宗淵というすばらしい老師の居る寺でもあった。この時から彼女は禅から能の奥儀を極めんと研鑽をしていたのであろうか。

しかし、本当に良く出来上がっていた。ワキのドラクロワと前シテ、調律師、後シテ、ショパンの霊。舞台正面の上手(右)下に置かれたピアノ、能楽堂にショパンのノクターンが響きピアノ曲でショパンの霊が舞う。本当にこの夜、ショパンが正に降臨した感動に襲われた。何と全てが違和感もなく一体融和した事であらうか。成功させたのは、銕仙会の人々との深い人間関係と、東大留学中の同期生である訳者、関口時正(東京外国語大学教授)であり、横山幸雄という名ショパン奏者(ショパン・ピアノソロ全 212 曲完全奏破者)を中心として、様々な人々の力であった事と推察する。

2011 年2月 20 日、ポーランド帰国公演はショパンの心臓が安置されているワルシャワの聖十字架教会において奉納上演された。「調律師―ショパンの能」は不朽の名作として、これからも長く、日本で、世界で上演されていく事はまちがいの無い事と確信する。

高くて、深い精神性のある作品であった。

2011 年3月 14 日(しもだ・ちよまろ)